

令和 3 年 5 月 28 日現在

機関番号：23201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K03091

研究課題名(和文) 親密な関係における暴力(IPV)の双方向性：発生・深刻化過程の縦断的調査研究

研究課題名(英文) A Longitudinal Study Regarding the Occurrence and Increasing Severity of Bidirectional Intimate Partner Violence

研究代表者

竹澤 みどり (Takezawa, Midori)

富山県立大学・工学部・准教授

研究者番号：90400655

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：カップルの双方が暴力をふるう親密な関係における双方向の暴力に着目し、その日本における実態と、発生や維持・深刻化過程の検討を行った。半年間隔で3回の縦断調査を実施した結果、被害経験のみや加害経験のみといった一方の群に比べ、カップルの双方が暴力をふるう双方向群の割合が多いことが明らかとなった。また、一方の群は時間の経過とともに被害・加害経験が減るのに対して、双方向群では被害・加害経験が維持されやすく、被害・加害経験の頻度も一方の群より高いことが明らかとなった。さらに、カップル間における統制感や葛藤解決方略が後のIPV被害・加害経験に影響を与えることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

親密な関係における暴力(IPV)に関して、海外の研究では双方向の暴力が多く深刻度が高いと指摘されているにも関わらず、日本では双方向のIPVを想定した研究はあまり行われていなかった。本研究によって、まず双方向の暴力を測定することの出来る尺度が開発され、次に双方向のIPVが一方のIPVと異なる特徴を有することが明らかにされた。さらに、縦断的検討で加害・被害につながる要因がいくつも明らかにされた。本研究で得られた知見は、今後の予防のための心理教育プログラム等の開発にも寄与しうると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The study focused on bidirectional intimate partner violence (IPV), wherein partners use violence against each other, examining the features and processes contributing to its occurrence and its increasing severity in Japan. The results of a three-wave longitudinal online survey suggested that more people identified themselves as both IPV perpetrator and recipient (bidirectional IPV) than as either perpetrator or recipient (unidirectional IPV). Bidirectional IPV was easier to maintain and had a higher frequency than unidirectional IPV. Furthermore, the couple's sense of control and conflict resolution strategies affected the cycle of IPV victimization and perpetration.

研究分野：心理学

キーワード：親密な関係における暴力 IPV 発生・維持過程 深刻化過程 縦断的調査

1. 研究開始当初の背景

内閣府(2015)の調査によると、交際相手からの暴力の被害を受けた経験のある人は14.8%であり、2012年の調査時に比べて増加している。また、婚約期間の身体的暴力は結婚後の身体的暴力の発生の可能性を高めることが指摘されており(Lorber & O'Leary, 2012)、予防や早期介入の点から結婚に至る前の交際関係における暴力に着目する意義は大きい。海外では、多くの研究でカップルの双方が暴力を振るう双方向の親密な関係における暴力(intimate partner violence: IPV)が最も生起頻度が高いことが示されている(Langhinrichsen-Rohling, Misra, Selwyn & Rohling, 2012など)。さらに、双方向のIPVはその頻度、深刻度、けがをする割合などが一方のIPVよりも高いことなどから、両者は異なる性質を持つ可能性があることも指摘されており、双方向のIPVについて明らかにすることが重要であるとされている(Palmetto, Davidson, Breitbart & Rickert, 2013)。海外においては、双方向のIPVが最も生起頻度が高く、被害の程度も大きいことなどから、双方向のIPVに焦点を当てた研究が行われつつある(Palmetto et al., 2013など)。しかし、日本においてはほとんどの研究は加害や被害の一方のみをたずねる研究であり、双方向のIPVを考慮に入れた研究はほとんど行われていないのが現状である。日本においては西岡・小牧(2008, 2009)が、被害者でも加害者でもある群を“バトル群”として抽出して検討している。その結果、バトル群は「基本的社会性」「関係満足」「自尊感情」が低く「怒り」が高いといった、どちらかといえば被害者の特徴に近いことを示し、被害者が反撃に出た結果、双方が加害者となるバトル群へと至った可能性があるとしている。しかし、横断研究であるため被害経験が加害行為につながったのかなど因果関係は定かではない。

2. 研究の目的

親密な関係における暴力では双方向の暴力が多く深刻度が高いと指摘されているにもかかわらず、これまでカップルの一方だけを被害者又は加害者と考えて検討している研究が多く、双方が暴力行為を行う双方向のIPVを想定した研究はあまり行われていない。そのため、双方向のIPVが日本においてどのくらい発生し、どのような過程を経て双方が暴力を振るうに至るのかは明らかとなっていない。本研究では、双方向のIPVの日本における実態と、その発生や維持・深刻化過程を明らかにすることを目的とする。

まず、研究1では著者らが作成した包括的IPV被害経験尺度の短縮版を作成し、その信頼性と因子構造の確認を行う。研究2では、作成した包括的IPV被害経験尺度の短縮版を基にIPV加害経験を測定するための尺度を作成する。続いて、研究3において双方向のIPVについて縦断的に検討することを目的とする。

3. 研究の方法

研究1：包括的IPV被害経験尺度の短縮版の作成

2017年に著者らが実施したWEB調査(竹澤・寺島・松井・宇井・宮前, 2020のTime1の調査)で収集したデータを基に心理的暴力・身体的暴力・性的暴力の3側面からIPVの被害経験を尋ねる包括的IPV被害経験尺度の短縮版の作成を行った。

研究2：加害経験尺度の作成

研究1で作成した包括的IPV被害経験尺度の短縮版の項目の文言を、加害経験を尋ねる内容に変更して包括的IPV加害経験尺度の項目を作成した。次に、作成した項目を用いて、18~29歳の現在交際相手のいる未婚の男女を対象にWEB調査を実施した結果、800名(男性400名・女性400名)から回答が得られた。

調査時期は2018年10月であった。

研究3：縦断的検討

6か月間隔で3回調査(T1~T3)を行う縦断調査をWeb上で実施した。

調査対象者：T1の調査時点で交際相手のいる未婚の18~29歳の男女を対象とした。T1では、613名(男性288名、女性322名、その他3名)、T2ではそのうちの328名(男性150名、女性176名、その他2名)が、T3では318名(男性151名、女性165名、その他2名)から回答が得られた。回答者のうちT1とT3に回答した人は75名、3回の調査全てに回答した人は243名であった。

調査内容：T1では、研究1で作成した包括的IPV被害経験尺度と包括的IPV加害経験尺度の短縮版に加え、研究2では妥当性の検討が不十分であったため、包括的IPV加害経験尺度の妥当性を検討するための既存の加害経験頻度質問紙(松野, 2017)を加えた。さらに、葛藤解決方略、精神的健康、交際相手への好意度などを測定した。T2, 3の調査では、T1の調査内容に加え、T1調査時の交際相手との関係性の変化(関係継続または関係終結や、結婚など)や現在の交際相手の有無について回答を求めた。妥当性を検討するために用いた加害経験頻度質問紙は尋ねていない。IPVを測定する尺度は、どれも現在の交際相手との関係における経験をたずねた。

調査時期：2019年12月にT1、2020年6月にT2、同年12~1月にT3を実施した。

4. 研究成果

研究1：包括的 IPV 被害経験尺度の短縮版の作成

包括的 IPV 被害経験尺度(宮前他, 2017)の心理的暴力・身体的暴力・性的暴力のそれぞれの下位尺度について、いずれも歪度と尖度が他の項目に比べて極端に高い項目を削除したのち、因子分析(最小二乗法・プロマックス回転)を実施した。因子分析の結果を基に、各因子の項目相関が高い項目のうち標準偏差が低い項目を削除し、残った項目のうち因子ごとにパターンが高い上位3項目を残した。それ以外の項目を削除し、残った項目に対して同様の因子分析を実施した。その結果、各因子に3項目ずつ想定通りに高い因子パターンを示した(Table1-3)。さらに、それぞれの係数を算出したところ、.66-.84の十分な高さの信頼性係数が得られた。次に、作成したこれらの短縮版尺度の因子構造の確認するために、構造方程式モデリングによる確認的因子分析を行った。その結果、それぞれの包括的 IPV 被害経験尺度の適合度指標は中～高程度の適合度を示した(Tabe4)。

Table1 心理的暴力被害経験尺度短縮版の因子分析結果

項目	I	II	III
I 自傷行為による脅迫 (= .84)			
私の気をひくために、相手は自殺をほめた	.99	-.02	.00
「別れるなら自殺する」などと脅された	.72	.03	.01
私を心配させようとして、相手はリストカットなどの自傷行為をほめた	.56	.00	-.03
II 束縛 (= .71)			
すぐにメール・LINEに返事をしなかったら、不機嫌になった	-.02	.69	.02
私が他の異性とかわると不機嫌になった	.04	.67	.05
私のスケジュールを細かく確認された	-.02	.66	-.06
III 見下し・怒りをぶつける行為 (= .67)			
「頭が悪い」など、バカにするようなことを言われた	.01	-.06	.80
体型や顔など、身体的な欠点をからかわれた	-.04	.01	.62
一緒にいるとき、私を無視するような態度をとられた	.04	.19	.41
IV 人権侵害・監視行為 (= .66)			
GPSで私の行動を監視された	.01	-.06	-.02
私のプライベートについて、勝手にネット上に書き込まれた	.07	-.03	.02
スマホ・携帯の履歴やアドレスを勝手に消された	.04	.15	.05
因子間相関			
	.50		
	.37	.57	
	.68	.60	.46

Table2 身体的暴力被害経験尺度短縮版の因子分析結果

項目	I	II
I 重篤な身体的暴力 (= .82)		
病院に行くことを妨害された	.85	-.02
ナイフなどの凶器を使って脅された	.75	.02
酒や薬物を無理やり飲まされた	.75	-.01
軽度～中程度の身体的暴力 (= .66)		
腕や足を強くつかまれた	.06	.75
相手がイライラしているとき、私の前でわざと大きな物音をたてた	.00	.67
からかうような調子で、軽くたたかれた	-.06	.55
因子間相関		.55

Table3 性的暴力被害経験尺度短縮版の因子分析結果

項目	I	II
I 性的無理強い行為 (= .81)		
嫌がっているのに、キスされそうになった	.87	-.10
嫌がっているのに、体を触られた	.77	.03
私の気が進まないのに、性行為を強要された	.51	.28
II 性的辱め行為 (= .70)		
性行為を拒否したら、別れをほめられた	.02	.73
私には性的な魅力が欠けていると侮辱された	-.07	.65
嫌がっているのに、ポルノメディアのような性行為を要求された	.12	.57
因子間相関		.71

さらに、包括的 IPV 被害経験尺度短縮版の性差を検討するために各因子項目の合計点を下位尺度得点とし、男女で t 検定を行った(Table5)。その結果、心理的被害経験尺度の下位尺度「自傷行為による脅迫」「人権侵害・監視行為」においては男性のほうが女性よりも得点が高く、心理的被害経験尺度の下位尺度「見下し・怒りをぶつける行為」と性的被害経験尺度の下位尺度「性的無理強い行為」においては、女性のほうが男性よりも得点が高いなど行為によって性差がみられた。しかし、いずれの場合も効果量は小さく、男女における得点の実質的な差は小さいと言えた。

Table4 包括的IPV被害経験尺度短縮版の確認的因子分析における適合度指標

	χ^2	df	p	GFI	AGFI	CFI	RMSEA
心理的被害経験尺度	296.642	48	<.001	.981	.970	.889	.044
身体的被害経験尺度	32.089	8	<.001	.996	.989	.983	.034
性的被害経験尺度	132.207	8	<.001	.983	.957	.900	.076

Table5 包括的IPV被害経験尺度短縮版各下位尺度の男女別平均値と t 検定結果

項目	男性		女性		t	p	d
	M	SD	M	SD			
心理的被害							
見下し・怒りをぶつける行為	3.53	1.21	3.74	1.33	3.43	.001	.16
人権侵害・監視行為	3.17	.68	3.10	1.41	2.06	.04	.12
束縛	4.01	1.47	3.91	1.43	1.32	.19	.07
自傷行為による脅迫	3.23	.91	3.12	.65	2.66	.01	.15
身体的被害							
重篤な身体的暴力	3.10	.61	3.12	.65	2.66	.20	.15
軽～中程度の身体的暴力	3.54	1.10	3.60	1.21	.95	.34	.16
性的被害							
性的辱め行為	3.10	.61	3.06	.47	1.29	.15	.07
性的無理強い行為	3.54	1.10	3.60	1.21	.95	.00	.05

研究2：包括的 IPV 加害経験尺度の作成

包括的 IPV 加害経験尺度の項目も包括的 IPV 被害経験尺度短縮版と同じ因子構造であると仮定し、構造方程式モデリングによる確認的因子分析を行った。その結果、包括的 IPV 加害経験尺度項目が包括的 IPV 被害経験尺度短縮版と同様の因子構造を持つモデルは妥当なものと判断され、心理的暴力尺度12項目、身体的暴力尺度6項目、性的暴力尺度6項目の包括的 IPV 加害経験尺度短縮版が作成された(Figure1-3)。適合度指標は中～高程度の適合度を示した。

$\chi^2 = 218.888, df = 48, p < .001, GFI = .954, AGFI = .926, CFI = .761, RMSEA = .067$

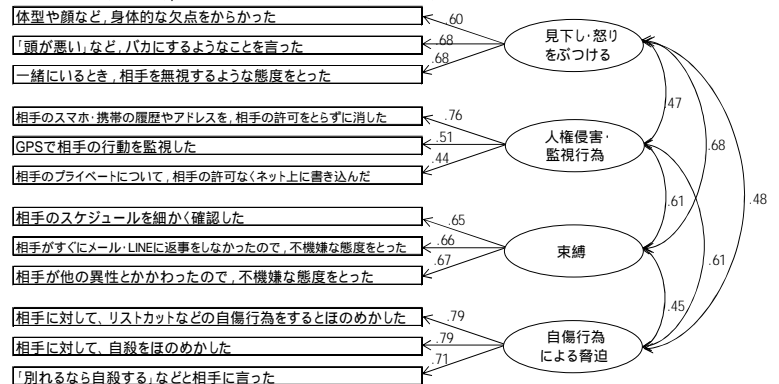


Figure 1. 心理的加害経験尺度短縮版の確認的因子分析

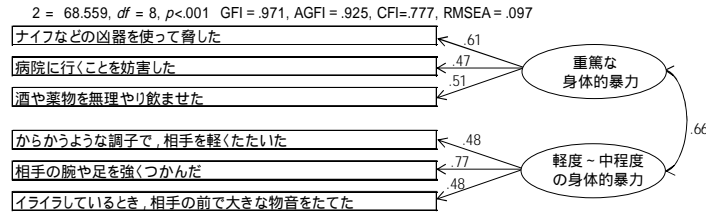


Figure 2. 身体的加害経験尺度短縮版の確認的因子分析

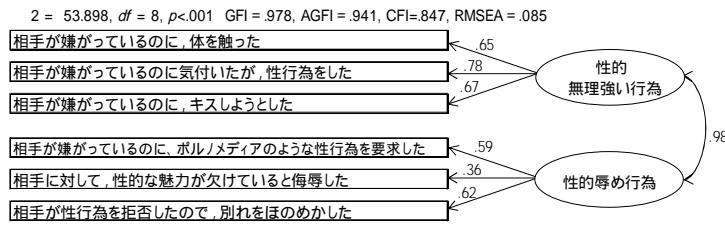


Figure 3. 性的加害経験尺度短縮版の確認的因子分析

次に、加害経験の性差を検討するために各因子項目の合計点を下位尺度得点とし、男女で *t* 検定を行った (Table 6)。その結果、性的加害経験尺度の下位尺度「性的無理強い行為」においては男性のほうが女性よりも得点が高く、心理的加害経験尺度の下位尺度「束縛」と身体的加害経験尺度の下位尺度「軽～中程度の身体的暴力」においては女性のほうが男性よりも高いなど行為によって性差がみられた。しかし、いずれの場合も効果量は小さく男女における得点の実質的な差は小さいと言えた。

Table 6 包括的 IPV 加害経験尺度短縮版各下位尺度の男女別平均値と *t* 検定結果

	男性		女性		<i>t</i>	<i>p</i>	<i>d</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>			
心理的加害							
見下し・怒りをぶつける行為	3.73	1.51	3.79	1.41	.63	.53	.05
人権侵害・監視行為	3.07	.52	3.12	.53	1.27	.20	.09
束縛	3.72	1.41	3.97	1.64	2.32	.02	.16
自傷行為による脅迫	3.10	.61	3.17	.75	1.45	.15	.10
身体的加害							
重篤な身体的暴力	3.03	.33	3.03	.26	.12	.91	.01
軽～中程度の身体的暴力	3.56	1.09	3.75	1.31	2.26	.02	.16
性的加害							
性的辱め行為	3.13	.64	3.07	.34	1.58	.12	.11
性的無理強い行為	3.36	1.08	3.20	.75	2.36	.02	.17

研究 3：縦断的検討

〔包括的 IPV 加害経験尺度短縮版の妥当性の検討〕

まず、研究 2 で作成した包括的 IPV 加害経験尺度短縮版の妥当性の検討を行った。包括的 IPV 加害経験尺度短縮版と既存の加害経験頻度質問紙 (松野, 2017) との相関係数を算出した。その結果、各下位尺度および包括的 IPV 加害経験尺度短縮版の合計のすべてにおいて、中程度以上の正の相関 (.57-.73) が見られた。これにより、作成した包括的 IPV 加害経験尺度短縮版の基準関連妥当性が確認された。

〔IPV の双方向性〕

T1 で得られたデータを基に、双方向の IPV がどのくらい起こっているのかを検討した。被害経験の有無、加害経験の有無を基に 4 群に分けた結果、被害・加害のどちらの経験もある双方向群が 39.2%、被害経験のみ (被害群) が 6.0%、加害経験のみ (加害群) が 17.0%、どちらの経験もない群 (経験なし群) が 37.8% であり、被害経験だけ、加害経験だけなどの一方向の IPV よりも、加害経験も被害経験もある双方向の IPV のほうが多く見られた。また、4 群で交際期間の長さに違いがみられるかを検討したところ、違いは見られなかった。この結果から、交際期間の長短で一方向又は双方向の暴力の起こりやすさに違いは見られないことが明らかとなった。

T2, T3 のデータを基にそれぞれの時点での被害経験の有無、加害経験の有無を基に 4 群に分けた。T1 から T2 (T1, 2 に回答した人を対象)、T3 (全 3 回すべてに回答した人を対象) にかけての群の変化を明らかにするために、クロス集計を行った (Table 7-8)。T1 から半年後の群の変化としては、双方向群以外の群はその多くの割合の人 (50~79%) が経験なし群へと移行するか経験なし群のまま変化しなかったが、双方向群は経験なし群へと移行した人が 19% であり、60% の人は双方向群のままであった。同様に、T1 から 1 年後の変化としては、上述の半年の変化と同じく双方向群以外の群はそのうちの 37~81% の人が経験なし群へと移行するか経験なし群のまま変化しなかった。一方、双方向群は 26% の人が経験なし群に移行しているが、未だ 46% の人が双方向群のままで、IPV が双方向で起こっている状況が維持されている人がほかの群に比べて多かった。つまり、双方向の暴力が生じているカップルは一方向の暴力が起こっているカップルに比べて、暴力が維持されやすいと言えるだろう。一方で、T1 時点での双方向群のうち半年で 19% が、1 年後には 26% が暴力の加害被害どちらもなくなっている。このことから、一時的に暴力が発生したのみで、その後暴力の発生はなくなるカップルと暴力がなくならず維持されてしまうカップルの 2 つのタイプが存在するこ

Table 7 T1 時点、T2 時点での 4 群のクロス集計表

	T2 時点				合計	
	経験なし群	加害群	被害群	双方向群		
経験なし群	度数	102	6	12	9	129
	%	79.1	4.7	9.3	7	
	調整済み残差	7.8	-1.7	-1.5	-6.6	
加害群	度数	12	6	1	3	22
	%	54.5	27.3	4.5	13.6	
	調整済み残差	0.1	3.6	-1.2	-1.4	
被害群	度数	23	2	13	8	46
	%	50	4.3	28.3	17.4	
	調整済み残差	-0.6	-0.9	3.5	-1.4	
双方向群	度数	17	8	10	54	89
	%	19.1	9	11.2	60.7	
	調整済み残差	-7.9	0.6	-0.5	9	
合計	度数	154	22	36	74	286
	%	53.8	7.7	12.6	25.9	

とが推察される。今後は、維持されるか否かに関わる要因を明らかにすることが必要であると考えられる。

さらに、T1 時点での被害経験の有無、加害経験の有無での 4 群別に各時期における被害経験加害経験がどのように変化していくのかを明らかにするために、時期と群を要因とした 2 要因分散分析を行った（全 3 回すべてに回答した人を対象とした）(Table9)。その結果、心理、身体、性のいずれの被害経験においても、群の効果のみが有意であり、双方向群が他の群よりも被害経験が高かった。加害経験についてもすべてにおいて群の効果が有意であり、双方向群は他の群に比べて加害経験が高かったが、身体的加害においては交互作用も有意であった。身体的加害について単純主効果検定を実施した結果、双方向群においてのみ T1 から T2 および T3 にかけて身体的加害が有意に減っていた。以上より、総じて時期による経験量の変化はあまり見られず、双方向群は被害群の被害経験、加害群の加害経験と比較しても被害、加害経験の頻度が高いことが明らかとなった。

Table8 T1時点、T3時点での4群のクロス集計表

		T3時点					
		経験なし群	加害群	被害群	双方向群	合計	
T1時点	経験なし群	度数	65	4	6	5	80
		%	81.3	5	7.5	6.3	
		調整済み残差	6.1	-2.5	-1.4	-4.4	
	加害群	度数	6	6	1	3	16
		%	37.5	37.5	6.3	18.8	
		調整済み残差	-1.6	3.4	-0.7	-0.3	
	被害群	度数	14	3	6	4	27
		%	51.9	11.1	22.2	14.8	
		調整済み残差	-0.5	-0.1	2	-0.9	
	双方向群	度数	15	8	7	26	56
		%	26.8	14.3	12.5	46.4	
		調整済み残差	-5.3	0.7	0.4	5.6	
合計	度数	100	21	20	38	179	
	%	55.9	11.7	11.2	21.2		

Table9 T1時点での加害被害の有無4群別に見た各時期におけるIPV被害・加害得点および分散分析結果

		時期						群			時期			群×時期		
		T1		T2		T3		F	p	備 2乗	F	p	備 2乗	F	p	備 2乗
群	群	M	SD	M	SD	M	SD									
心理的被害	経験なし群	1.00	0.00	1.02	0.07	1.04	0.20	18.71	<.001	0.24	0.22	0.73	0.00	1.54	0.19	0.03
	加害群	1.00	0.00	1.02	0.05	1.04	0.10	多重比較:								
	被害群	1.15	0.15	1.04	0.08	1.13	0.38	双方向群 > 経験なし群、								
	双方向群	1.27	0.26	1.27	0.46	1.19	0.46	加害群、被害群								
身体的被害	経験なし群	1.00	0.00	1.03	0.12	1.04	0.19	14.1	<.001	0.2	0.31	0.68	0.00	0.91	0.47	0.02
	加害群	1.00	0.00	1.00	0.00	1.03	0.09	多重比較:								
	被害群	1.06	0.10	1.01	0.04	1.09	0.36	双方向群 > 経験なし群、								
	双方向群	1.21	0.37	1.28	0.46	1.20	0.49	加害群、被害群								
性的被害	経験なし群	1.00	0.00	1.01	0.06	1.04	0.19	11.31	<.001	0.16	0.97	0.36	0.01	0.74	0.58	0.01
	加害群	1.00	0.00	1.01	0.04	1.02	0.08	多重比較:								
	被害群	1.04	0.12	1.07	0.21	1.11	0.32	双方向群 > 経験なし群、								
	双方向群	1.17	0.35	1.27	0.49	1.19	0.47	加害群、被害群								
心理的加害	経験なし群	1.00	0.00	1.01	0.05	1.05	0.21	21.15	<.001	0.27	0.17	0.77	0.00	2.38	0.05	0.04
	加害群	1.10	0.10	1.05	0.10	1.05	0.07	多重比較:								
	被害群	1.00	0.00	1.03	0.08	1.08	0.37	双方向群 > 経験なし群、								
	双方向群	1.33	0.35	1.28	0.40	1.20	0.46	加害群、被害群								
身体的加害	経験なし群	1.00	0.00	1.01	0.08	1.06	0.26	16.81	<.001	0.22	0.73	0.45	0.00	2.6	0.03	0.04
	加害群	1.10	0.21	1.04	0.07	1.08	0.15	多重比較:								
	被害群	1.00	0.00	1.01	0.03	1.09	0.35	双方向群 > 経験なし群、								
	双方向群	1.34	0.43	1.24	0.40	1.19	0.47	加害群、被害群								
性的加害	経験なし群	1.00	0.00	1.00	0.04	1.04	0.20	8.69	<.001	0.13	0.02	0.96	0.00	0.79	0.55	0.01
	加害群	1.04	0.13	1.02	0.08	1.00	0.00	多重比較:								
	被害群	1.00	0.00	1.04	0.16	1.09	0.36	双方向群 > 経験なし群、								
	双方向群	1.22	0.43	1.22	0.48	1.17	0.54	加害群、被害群								

次に、IPV 被害・加害経験や関連要因がその後の IPV 被害・加害にどのような影響を与えているかを検討するために T2 または T3 時点での IPV 被害および加害を従属変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を実施した。その結果、得られた主要な結果は以下の通りであった。T1 時点での各変数を説明変数とし、T2 時点での IPV を従属変数とした分析では、T1 の IPV 被害は T2 での同種の IPV 被害を、T1 の IPV 加害は T2 での同種の IPV 加害を高めることが明らかとなった。さらに、T1 の統制感（交際相手と一緒にいるときにも自身のペースで行動できたり、物事を自分で決めることができたり、気分や感情を素直に表に出すことができる程度）が低いほど、T2 のすべての IPV 被害および加害を高めることが明らかとなった。次に、T2 時点での各変数を説明変数とし、T3 時点での IPV を従属変数とした分析では、T2 の心理的 IPV 加害経験が、T3 のすべての種類の IPV 被害・加害経験を高めることと、カップル間で生じた葛藤を解決する際に、お互いに満足するような結論を見つけ出そうとしたり、お互いの意見に歩み寄りするような互恵的な解決方略を用いる傾向が低いほど T3 のすべての種類の IPV 被害・加害経験を高めることが明らかとなった。

最後に、T1 時点での各変数を説明変数とし、T3 時点での IPV を従属変数とした分析では、T1 の心理的 IPV 加害経験が T3 のすべての種類の IPV 加害を高めること、カップル間で生じた葛藤を解決する際に相手の要求に従ったりなど相手に追従するような方略を行ったり、何もできないと感じたりただ泣くだけといった葛藤解決を回避するような方略を用いる傾向が高いほど T3 のすべての種類の IPV 被害・加害経験を高めることが明らかとなった。以上より、T1 から T2 に影響する変数が、T1 から T3 に影響するものと異なることから、短期的影響と長期的影響が異なることが推測された。一方で、同じ半年間隔である T1 から T2、T2 から T3 への影響でも、影響を与える要因が異なっていた。これは、同じ半年の間でも異なる社会環境に置かれていたことが関連していると推測されたが、この点については本研究からのみでは結論を出すことができない。今後さらなる検討を要する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 寺島瞳・竹澤みどり・宮前淳子・松井めぐみ・宇井美代子	4. 巻 29
2. 論文標題 IPV (Intimate Partner Violence) 関係継続・終結の意思決定に関する性差の検討 投資モデルの観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 パーソナリティ研究	6. 最初と最後の頁 94～96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2132/personality.29.2.8	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宇井美代子・宮前淳子・松井めぐみ・竹澤みどり・寺島瞳	4. 巻 12
2. 論文標題 Intimate Partner Violence (IPV) 被害経験とジェンダー観	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 玉川大学学術研究所人文科学研究センター年報 『Humanitas』	6. 最初と最後の頁 47～56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹澤みどり・寺島瞳・松井めぐみ・宇井美代子・宮前淳子
2. 発表標題 Intimate Partner Violence (IPV) 被害経験に関する縦断的研究 (1) 被害経験における性差の検討
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松井めぐみ・宇井美代子・宮前淳子・竹澤みどり・寺島瞳
2. 発表標題 Intimate Partner Violence (IPV) 被害経験に関する縦断的研究 (2) IPV被害経験が後のIPV被害経験に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 寺島瞳・松井めぐみ・宇井美代子・宮前淳子・竹澤みどり
2. 発表標題 Intimate Partner Violence (IPV) 被害経験に関する縦断的研究(3) IPV被害経験がパートナー間での社会的勢力に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮前淳子・竹澤みどり・寺島瞳・松井めぐみ・宇井美代子
2. 発表標題 Intimate Partner Violence (IPV) 被害経験に関する縦断的研究(4) IPV被害経験がパートナー間での葛藤解決方略に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宇井美代子・宮前淳子・竹澤みどり・寺島瞳・松井めぐみ
2. 発表標題 Intimate Partner Violence (IPV) 被害経験に関する縦断的研究(5) IPV被害経験が精神的健康に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹澤みどり・宮前淳子・寺島瞳・宇井美代子・松井めぐみ
2. 発表標題 IPV (Intimate partner violence) 被害・加害経験尺度の短縮版の作成(1) 心理的暴力被害尺度について
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宇井美代子・宮前淳子・寺島瞳・松井めぐみ・竹澤みどり
2. 発表標題 IPV (Intimate partner violence) 被害・加害経験尺度の短縮版の作成 (2) 身体的・性的暴力被害尺度について
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松井めぐみ・寺島瞳・宇井美代子・竹澤みどり・宮前淳子
2. 発表標題 IPV(Intimate partner violence)被害・加害経験尺度の短縮版の作成 (3) 加害経験尺度短縮版の作成と性差の検討
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 寺島瞳・竹澤みどり・宮前淳子・宇井美代子・松井めぐみ
2. 発表標題 IPV関係の終結・継続の意思決定に投資モデルが及ぼす影響の検討
3. 学会等名 日本健康心理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宇井美代子・宮前淳子・松井めぐみ・竹澤みどり・寺島瞳
2. 発表標題 IPV(Intimate Partner Violence)被害経験とジェンダー観
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮前淳子・竹澤みどり・宇井美代子・寺島瞳・松井めぐみ
2. 発表標題 IPV(Intimate partner violence)による被害経験と交際期間および居住形態との関連
3. 学会等名 日本健康心理学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮前 淳子 (MIYAMAE Junko) (10403768)	香川大学・教育学部・准教授 (16201)	
研究分担者	寺島 瞳 (TERASHIMA Hitomi) (30455414)	和洋女子大学・人文学部・准教授 (32507)	
研究分担者	松井 めぐみ (MATSUI Megumi) (60400652)	岡山大学・全学教育・学生支援機構・准教授 (15301)	
研究分担者	宇井 美代子 (UI Miyoko) (80400654)	玉川大学・リベラルアーツ学部・教授 (32639)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------